

論文の内容の要旨

論文題目 エマニュエル・レヴィナスと「場所」の倫理

氏名 藤岡俊博

本論文「エマニュエル・レヴィナスと「場所」の倫理」は、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの思想を「場所」の概念を中心に読解し、レヴィナスの「倫理」がこの概念に関わるさまざまな主題をめぐってどのように組み立てられているのかを明らかにする。

本論文は全五部に分けられる。

第Ⅰ部「具体性の諸相」では1930年代のレヴィナスの論考を取り上げる。まずフッサール、ハイデガーのもとでの現象学研究から出発したレヴィナスが、現象学が試みている具体的な生の分析をどのように評価していたのかを見たうえで、レヴィナスが独自の哲学を展開し始める論文「ヒトラー主義に関する若干の考察」（1934年）および「逃走について」（1935年）を追いながら、レヴィナスの哲学が具体的な生と実存の粗暴さに対する両義的な関心から出発していることを示す。次に、同時期にレヴィナスが執筆している数本のユダヤ教論考の読解によって、生の具体性からの脱却の可能性がユダヤ教のうちに認められていることを確認する。第Ⅰ部は全体として、世界への内在と世界からの超脱、存在の自然性とその批判といった、生涯にわたるレヴィナスの関心の端緒を示すことで、第Ⅱ部以降への導入となる。

第Ⅱ部「環境世界と根源的場所」では、初期レヴィナスの主要著作『実存から実存者へ』（1947年）を中心的に読解する。まずハイデガー『存在と時間』（1927年）との比較によってレヴィナス自身の「世界」概念を調査し、同著作でレヴィナスが提示する〈ある〉の議論を通じて、存在論的差異の改鑄によってハイデガーの「世界」概念の乗り越えを目指すレヴィナスの試みを

検討する。その際、〈ある〉の概念の導入に際して哲学者・民族学者リュシアン・レヴィ＝ブル
ジュールによる「未開心性」の分析が果たした役割を明らかにする。以上で『実存から実存者へ』
の議論の大綱を踏まえたうえで、ハイデガーの「環境世界」の議論との対照によってレヴィナ
スの「場所」の概念を精査する。ハイデガーが示したように、現存在を取り巻く環境世界のう
ちに各々の位置を占める「用具的存在者」は、相互の指示連関に応じてそのふさわしい居場所
を有しており、現存在もまた環境世界内に整序された存在者の配置に従った振る舞いを取るの
だが、それに対してレヴィナスは、「場所」の所有および「ここ」への局所化こそが存在者の成
立の根拠であるという仕方で議論を転換し、〈ある〉という場所の不在からの主体化の出来事を
動態的に捉えるのである。本論は、人間存在の根本的な「地理性」をレヴィナスへの参照に基
づいて提唱する地理学者エリック・ダルデルの著作の批判的読解によって、レヴィナスの「場
所」の議論の焦点を環境世界論の側から逆照射する。第 II 部全体を貫く環境世界と根源的場所
という対立は、《同》の議論が本格的に展開される『全体性と無限』を解釈する際の本論の立場
を提示するものでもある。

第 III 部「居住と彷徨」は、レヴィナスが精力的に論文を発表していく 50 年代から主著『全
体性と無限』（1961 年）までのテキストを対象とする。まず 50 年代のレヴィナスの思想の軸線
を、存在論の「根源性」への批判、ハイデガーの「居住」思想に対する反応、フッサールの再
解釈という三点から提示する。次に『全体性と無限』第 2 部「内部性と家政」の集中的読解に
基づいて、レヴィナスがハイデガーの居住思想をどのように吸収し自らの哲学のうちに組み込
んでいったのかを明らかにする。「享受」の概念を中心に展開されるレヴィナス自身の環境世界
論を俎上に載せることによって、根源的な「場所」の所有に依拠した「わが家」という内部性
が《同》としてその領域を拡大していく様態が記述される。次いで、レヴィナスにおける「他
者」の議論が、この《同》を超越するものとしてはじめて導出されていく筋道を、特にレヴィ
ナスの「場所」批判と深く結びついた「異教」の概念を中心に追っていく。まずハイデガーの
居住思想を異教的な「場所」への執着と断じたテキスト「ハイデガー、ガガーリン、われわれ」
（1961 年）を『全体性と無限』との関連で読解したうえで、異教・無神論・一神教という三層構
造が『全体性と無限』の理論体系を下支えしていることを示す。さらにレヴィナスが使用する
異教の概念の発想源と推測されるフランツ・ローゼンツヴァイクの思想との比較検討を行い、
場所への固着・世界への内在性という異教の哲学的含意と、哲学と神学との積極的協働を旨
す両者の企図をテキストに沿って跡づける。最後に、異教をめぐる以上の議論を踏まえたう
えで、あらためてレヴィナスとハイデガーの思想が対峙する様態を検討する。問題となるのは、
存在の神秘から眼を背けた日常的な現存在の「彷徨」を語るハイデガーの小論「真理の本質に
ついて」（1943 年）と、レヴィナスによるその解釈である。この比較を通じて、第 III 部では最
終的に、両者において居住／彷徨が単純な対立としては捉えられない対概念であることを示す

ことで、レヴィナスとハイデガーの思想的対立を同一の議論の枠組みのなかで捉え返すことが目指される。

第Ⅳ部「非場所の倫理」では、70年代の中心的著作である『存在するとは別の仕方』(1974年)周辺のテキスト群を扱う。まず『全体性と無限』出版後にレヴィナスが発表した諸論文の分析によって、「場所」から「非場所」へと議論の根幹を移したレヴィナスの思想の内的運動を解釈する。特に、この時期の論文ではじめて本格的に提出されることになる「痕跡」および「近さ」の概念に焦点を合わせ、レヴィナスの言わば「場所論的転回」を準備した概念構成を整理する。次に『存在するとは別の仕方』の読解によって、70年代のレヴィナスの思想を「非場所の倫理」として取り出していく。とりわけ問題となるのは「他者のための一者＝他者のかわりの一者」という「身代わり」の構造である。さらに同著作でレヴィナスがしばしば用いる「われここに」という聖書表現を取り上げ、自らが占める場所によってではなく他者の「呼び声」への「応答」によって規定される主体性の様態を記述する。「非場所」自体は形式的な概念であり、この概念は実際には「身代わり」に代表される諸概念によって具体的な内実を与えられるのだが、さらにレヴィナスは他の思想家や著述家に仮託して「非場所の倫理」を語ることがある。本論では、『存在するとは別の仕方』と同時期に書かれ、同書の議論と密接な関係を持っているレヴィナスの詩人論「パウル・ツェラン 存在から他者へ」と「今日のエドモン・ジャベス」(いずれも1972年)を取り上げ、「場所」と詩作との連関を問うハイデガーの詩論との対照において、これらの詩人とレヴィナスの思想交流を論じる。最後に、ウジェーヌ・ミンコウスキー、フーベルトゥス・テレンバッハといった精神病理学者の議論を参照しながら、『存在するとは別の仕方』の結論部でいささか唐突に現れる「雰囲気」の概念を論じていく。その際、レヴィナスの最初期の論文「仏独両文化における精神性の理解」(1933年)がすでにこの主題に目配せをしていたことに着目することによって、具体的空間に対する初期の関心と、雰囲気としてのしかかる他性の侵襲を耐え支える主体という後期の関心とが接続する論点を読み解いていく。後期テキストを扱う第Ⅳ部は、レヴィナスの哲学著作の時系列的な読解に基づいて本論が抽出する「非場所の倫理」の総括である。

第Ⅴ部「レヴィナスとイスラエル」は、上記四部では直接扱っていないレヴィナスのユダヤ教論考を取り上げ、「場所」の主題と密接な関係を有する「約束の地」およびイスラエル国の問題を論じる。まず、イスラエルをめぐるレヴィナスの議論の前提となっているイスラエルと「離散」のあいだの緊張関係を明るみに出すために、ユダヤ人子弟へのユダヤ教育を実践した教育者としてのレヴィナスの活動の軌跡を辿る。次いで、イスラエルが劇的な勝利を収めエルサレムを占有するに至った1967年の第三次中東戦争(「六日戦争」)の前後に発表された、レヴィナスのユダヤ教論考およびタルムード講話「約された地か許された地か」(1965年)を読解する。レヴィナスにとって、「約束の地」の所有は普遍的な「正義」の名においてのみ正当化されるも

のだとされるが、そこではいかなる正義が問題となっているのかが問われなければならない。本論は「約束の地」の議論を『存在するとは別の仕方』の正義論と照合しながら、この地における場所／非場所の二重性を倫理的要請と政治的要請とが拮抗する局面として解釈していく。その際、生涯を通してフランスに留まったレヴィナスの身振りを、六日戦争後にイスラエルに移住したアンドレ・ネエルらと対置して分析する。さらに「高さ」の主題に注目することで、「場所かつ非場所」というユートピア的な両立が、レヴィナスが論じる主体性とイスラエルの双方に共通して見られる構造であることを示す。第 V 部は、レヴィナスの思想を構成する哲学著作とユダヤ教論考という二つの次元を「場所」の主題を軸に架橋する試みでもある。